

修道院と東京大学との境界に生きて

—第二話 Cosmos から Chaos へ—

吉 澤 昇

第1章 廻廊への憧憬とTree Church

君に問う 生暖き夏の日暮れ時に
ただ一人 古き修道院の壁に向かい
昔を偲び 君は遠き日に 思い馳せるか
流れ行く ときの流れを 悼むのか 黙々と

白銀の月光の明かりに 君は見つめた
修道院の廻廊や 墓石の陰影を
立ちせまる木々に 自然ものみな静みゆき
小夜鳴き鳥のみ 夜のしじまに声を震わす

この詩はEduard Spranger (1882-1963) が15歳の時の作品である。教育学者でもある彼の著書は、戦前から邦訳され、影響は大であった。彼が思春期に残したこの詩は、1924年にドイツで公けにされた。日本でも翻訳が昭和12年に出版された『青年期の心理学Psychologie des Jugendalters』の第3章に見出される。青年が、在るがままの自然に引きつけられ、それに歴史的な連想が加わる思春期である。人生の社会的地盤への憧憬が開かれ、芸術創作に導かれる。15歳のシュプランガーは、ベルリンの修道院付属で古典語中心のギムナジウムに学んでいる。1882年にベルリン郊外に生まれたシュプランガーは、2つの大戦を経験した。毀誉褒貶の埃りにまみれた人生であった。15歳の思春期は、世紀末にあっていた。ベルリンが最も輝いていた時であった。私はベルリンには6回ほど、壁が崩れた後、フンボルト大学やベルリン自由大学のゲストハウスなどで日々をすごした。植物園そばの小学校では、宗教の授業を参観した。しかしシュプランガーの学んだグラウエン修道院付属ギムナジウムがどうなったか知らない。

修道院付属といっても、宗教改革以後に福音派の地域では、カトリック教会の修道会士を排除してきた。2000年にドイツで、ユネスコの世界遺産として

登録されていた施設は27ヶ所ある(1996年には21ヶ所あった)。バイエルンのWieskirche、Heidelbergに近い、ライン川ぞいの小都市Speyerや大都会ケルンにあるDom(大聖堂)は、日本人の観光客に知られている。しかし、建築様式が全く異なり2つとも世界遺産となった修道院を、日本で知る人は少ない。760年に創設され、774年にカール大帝によってReichskloster帝国の修道院と名づけられたLorsch(Mannheim近く)と、850年創設のMaulbronn、この2ヶ所の修道院が、世界遺産に登録されている。

Maulbronnは、Schwarzwaldに近い。2005年10月にTübingen大学に滞在した時、ヘルマン・ヘッセの生地Calwを通して、Maulbronnへ行った。850年に修道院が開設され、1147年にベルナルドゥス由来のシトー会の修院となっている。ヘッセの小説『車輪の下Unterm Rad』を読むと、このカトリックの施設が、宗教改革とフランス革命後の世俗化(教会財産の国有化)をうけ、1807年からシュヴァーベン諸州の神学校になっている。ヘッセは、1891年9月15日、14歳で神学校へ入学したが、ヘッセの近親者の書簡では、in das Kloster eintretenと書かれている¹⁾。1年も経過してない1892年5月7日に、Maulbronnを去っており、教会から分派Sekteへのヘッセのさすらいが始まる。人は何故、正統から異端へ、教会からセクトへと、生涯流れていくのか。流転の原因とは。遍歴の仕組は何か。

シュプランガーが15歳の思春期に創作した詩に登場する「古き修道院」には、廻廊Kreuzgang(フランス語ではcloître)が詠みこまれている。修道院の壁Klostermauern、廻廊、墓石、そして木立ち。クレルヴォーのベルナル(Bernard de Clairvaux 1090-1153)は、1115年、シトーの北隣りのAubeにあるClairvauxの溪谷に、神との感覚的一致を志向する修道院を建設している。彼は1078年にBeauneの子爵領シトーで始められていた修道院を、1112年にま

ず再興した。ベルナルは、パリで活躍していたピエール・アベラル（1079-1142）を批判して、次のように発言している。「汝らは、書物よりも森の中で、魂に益するものを見出すであろう。森と石は、どのような教師よりも、多くのことを教える」²⁾。

シュブランガーの詩には、森と石の修道院が詠みこまれている。彼が学んだ修道院付属ギムナジウムに、中世の廻廊が保存されていたのか、不明であるが。シトーには、15世紀の廻廊が保存されている。再建された大廻廊もある。日本では、ロマネスクからゴシックの建築や彫刻の写真集で、廻廊も紹介されている。スペインに近い南西フランスのモワサックのサンピエール修道院教会廻廊がよく知られている。岩波書店刊のケンブリッジ西洋美術の流れ第2巻の叙述が、ClunyとCiteauxという、ロマネスク教会美術における対立する2派の主張を、簡潔に紹介している。飾りを廃したシトーや渡島当別トラピストの聖廊下。異を唱えるように柱頭彫刻が見られる「芸術のための芸術のCluny的誘惑」（ポーサン『石と信仰とのたむわれ』148頁）。木と石の世界を歩み始めたシュブランガーの個々の体験は、人生の拠所となる Weltfrömmigkeit 現世的敬虔の探求へ向う。幼児洗礼を原点とした私が、信仰と Welt（此岸＝社会）との関わりを問い始めたのは、武蔵野の林にあった修道院の木立からだったのではないか。

初めて修道院を眺めたのは、私が小学4年生の終業式のころである。清瀬の下清戸1002番地にあったマリア会修練院 Noviciat へ、志願院のある九段富士見町へ行く前に、下見に行った。清瀬の建物は広い中庭を囲んで、東にフランス風の教会堂があり、南に2階建ての洋館、それに隣接して（長崎から移設した？）木造の2階屋があった。そこには長崎の聖マリア学院から送られたと、小学4年の私が推測した蔵書の積み重ねが放置されていた。北へ長い廊下があり、広い中庭の北奥には、広大な食堂と厨房、作業室や、おそらく風呂場などがあった。それまで私は、幼児洗礼を授けたシェーレル神父が建設し、神田女学園そばに今も残る神田教会や、学童疎開先の軽井沢で、日曜日に歩いて行った軽井沢カトリック教会、それにベトレヘムの園の畳敷き（結核患者用小部屋2室も分離した）聖堂などを経験していた。しかし中庭があって、それを囲む三方向の建物と、それらを結ぶ通路との、4辺造りの修道院建築は、初経験であった。清瀬村には、敗戦

直後のその頃、多くの療養所があった。そのうちの古い病棟には、大陸からの引き揚げ者が、借り住まいしていた。秋津駅周辺は麦とおかば（陸稲）の二毛作の田畑が多く、清瀬駅あたりは、松林であった。日本の農村風景にあって、私が初めて見た修練院は異人さんの住処と映った。

早稲田通りと二合半坂との間に挟まれて建てられた九段の志願院に、私が移って3ヶ月足らずの6月9日、清瀬の回廊つき修練院は、漏電火事で大半が焼失した。記録によると、焼失後9月に、京王線柴崎と深大寺との中間にあった神代村に修練院は移っている。そこには旧彦根藩主井伊家の家屋があった。その和風の家屋は、晃華学園の洋風建築が完成した後、汚れなきマリア会（マリア会第2会）の修道院となった。まだ小学生だった時、この井伊家の別宅跡を訪れたことがあり、その時の印象が作文として残っている。ドイツの Regensburg で夏をすごした2004年に、Regensburg大学のゲストハウスで、Oxfordに研修に来ていた晃華の優秀な卒業生に遭い、奇縁を覚えた。1997年3月に札幌で殺された私の心友・吉村新一朗神父の妹たちも、晃華で修道女として働いていたと思う。

修練院が清瀬村から神代村へ移った後のことである。1949年夏休みに、焼失の後片付けもすんだ下清戸へ行った。修練長の Madinabeitia 神父や指導に当たっていた邦人修士も、井伊家別宅へ移っていた。焼失を免れた北奥の大食堂や作業室などを利用して、3人ほどの邦人修道士が猛暑の夏を過ごしていた。3人とも、おそらく高等小学校卒業で、志願院入りし、短期修道誓願立願を経て、すでに終身誓願をすませた人たちであった。一人は、1943年4月、私の暁星小学校入学にさいし、制服作りで世話になった仕立屋さんの古田松蔵修道士だった。他に畑仕事と家畜の世話をしていた畑原純雄修道士、もう一人はよく記憶していないが、日常的家事を担当していた修道士であった。余談であるが、暁星小学校の制服は、今日でも目立つ。戦時中、空襲下に帰宅する時など、衣服で判別して、家から救護を電話で依頼できた。中野駅から沼袋まで、空襲警報下、商店主に自転車で送られたこともある。音楽評論家の堀内敬三さんに、バスのなかで声をかけられ、堀内家に案内され、吉澤家では禁じられていた漫画「ノラクロ」を何冊も借用したこともある。斉藤秀雄（1920年卒）、山本直忠（1922年卒）など、ライ

ブツイヒの音楽学校へ暁星から洋行した音楽家の他、敗戦前まで日本に3台しかなかった、パイプオルガンの1つが暁星の聖堂にあったことなど、堀内さんも暁星に関心をもっていたのだろう。近所には敗戦後に活躍するピアニストの田中希代子さんの生家もあった。1945年5月の大空襲で、我が家も含め沼袋一帯は灰燼に帰した。突然、すべては変わってしまった。“Plötzlich ist alles ganz anders.”

「クリュニー」や「シトー」の聖堂と回廊を隈ばせたフランス風の修練院は、1947年6月に消え去り、ミサを挙式し、秘跡を司る神父や、学識がある邦人の教育修道士たちも、旧井伊家の別荘へ去ってしまった。神父や教育職の修道士を欠いた3人の労務修士だけの共同体 *communauté* は、今日の表現を借りれば、森の中の *tree-church* で生きていた。21世紀の日本でも、手づくりの *tree-house* が流行している。多くは実用的というより、自然鑑賞の愛好家向けの *tree-house* だが、*tree-church* は、天と地を結ぶ、ある意味で超越的であり、しかし「現世的敬虔の探求」を表現していた。林の木立の間に板を渡して組み合わせ、堅く支え合わせて広間をしつらえてあった。梯子をかけ、登り降りする。8月の猛暑にあっても、涼風を求められた。聖職者が不在の小さな共同体は、枝に支えられて祈りの時を過ごしていた。ミサはどうしていたのか。私は問うていない。ベトレヘムの園まで、歩いてか、あるいは自転車かよっていたのか。

1949年5月（まだ占領下であった）に、焼跡にアメリカ軍から払い下げられた蒲鉾兵舎が建てられている。いつ修練院が再開したのか。私の記録では不明である。しかし、*tree-church* は、1948、49の2年の夏だけという短命だったようだ。49年4月からは、私も、急坂で小学生泣かせの「二合半坂」を西へ渡り、小学校から中学校へ移る。暁星中学校の校庭に建てられた雨天体操場 *プレオ préau* の2階が、修道志願者の共同大寝室だった。そこでは、時にはドイツ・Oberammergauの受難劇など西欧キリスト教演劇の伝統をうけ、ベッドを片づけ素人芝居も上演していた。小学生の時から、子役を命じられて育った。中学生になると制服も変わる。中学時代に芝居の記憶はない。伝統が争う文化の対立、カオスの時期へ、人生の舞台が移っていく。

暁星中学では学年末に、在日フランス大使館から、フランス語を学ぶ生徒の一人に、大使賞が贈られる。

1950年3月に私が手にしたのはEmile Mâleが監修した *Aspects de l'art français* (La documentation française 公刊) であった。今でこそエミール・マールの『ヨーロッパのキリスト教美術』2巻を、岩波文庫で容易に読める。東大教授にも一読を勧めたい。この紀要掲載の論文にもひどい誤りが見出される。*Aspects de l'art français* は、フランスの芸術全般にわたる集大成で、私が大使賞として頂戴したのには、Série 11のロマネスク彫刻とSérie 13のゴシック建築が含まれていた。それぞれ13枚の写真と紹介文による構成である。1950年当時の賞品であり、白黒の写真のみである。それを中学1年生に授与したのは、大使館の手違いだったとか、後に聞かされた³⁾。実際翌年2年生の終業式に贈られたのは、17世紀のヴァイオリンの名手G. B. Lullyについての、260頁の単行本であった。Au clair de la lune, Mon ami Pierrotで始まるフランスの子どもの歌や、フロンドの乱、ルイ14世、コルベール、モリエールも登場する。フランス宮廷の芸術をめぐる有名人や地名、公然の秘密と、日本人には理解し難い秘話なども含まれ、あまりにも雑然としていて、中学生には読みにくい賞品だった。しかしフランス風「月光の曲」の元歌とその替え歌、それに音符とを見出し (p. 25-27)、今日になって貴重な古書である。

素直に言うと、毎年フランス大使賞を独り占めしていながら、中学3年間、誰にフランス語を学んだか、先生の名前も顔も記憶がない。名簿には、グットレーベン、ガヴァルダと2名のフランス人修道士が、中学で教えていたとされる。日本人としては、当時すでに60歳前後だった山田修道士の可能性もある。修道士以外にも、20歳代から30歳代の3人、長谷川克彦、荻宿俊幸、野村二郎が教員名簿に記載されている。荻宿、野村両先生には、高校でフランス語を教わった。長谷川先生は、社会科の教師であり、フランス語の教育は任されていない。彼は陸軍幼年学校と士官学校でフランス語を学び、敗戦後 法政大学に入学、文学部で哲学を学んでいる。梶田啓三郎が哲学研究の師であったという。軍隊の学校にあって敗戦を迎えたという状況下で、実存主義に傾斜していた当時の学界を体現していたようだ。1958年3月に、ルソーの『孤独な散歩者の夢想』の邦訳を角川文庫から出版している。その時すでに暁星を去り、当時の大月市立短大（都留文科大学）で教えていた。

中学3年間に受けた授業を担当した教師は数多いたが、授業内容で印象が強烈であったのは、このルソーの哲学を研究していた長谷川さんの授業だけである。社会科で何を教えられたかは全く記憶がない。紙数に余裕があれば、後半で詳しく書き残したいが、『あたらしい憲法のはなし』という文部省の教材にまつわる事件がある。この教材は、文部省によると全国の中学1年生が学習する教材として発行された。しかし、暁星中学では、この教材を教室で用いなかった。すくなくとも、私が中学に入った1949年度には。だから長谷川さんの社会科で、新憲法についての発言はなかった。しかし新憲法に関する発言ではないが、教室で中学生を前にして、幼年学校卒、士官学校途次に敗戦の哲学者が、怒りの大爆発を止められなかった事件が生じた。それは新憲法の精神にかかわるが、占領軍による日本の民間人の私信検閲と召喚・尋問の問題である。

敗戦後、対日講和条約が1951年の9月に調印されたが、占領軍総司令部が廃止されたのは1952年4月28日である。すでに1951年4月11日に、トルーマンによって、マッカーサーは解任されていた。筑摩書房が、1961年10月に公刊した『日本の百年 2 廃墟の中から』には、占領軍による被害について実話記録や統計が記述してある(187-215頁)。しかし占領軍が強行した手紙・葉書などの検閲について、全く言及していない。著者代表が鶴見俊輔だから、『日本国憲法』第21条2項で、「検閲は、これをしてはならない。通信の秘密は、これを侵してはならない」とあるのに、被害を無視しているのに驚いてしまう。長谷川先生は、自分が幼年学校、士官学校の関係者だから、GHQが狙い撃ちしていると怒った⁴⁾。

恐らく長谷川先生の心中では、暁星学園の教育方針に、検閲の仕組が隠されていると感じていて、それへの反発もあったのだろう。ルソーはじめ、啓蒙期や自然主義、反権威主義の文学や思想を、暁星では口に出せなかった。長谷川さんは、ごく短い月日、沈黙を守り、去った。ルソーを愛好していたと、私たちは知らなかった。

中学卒業にさいし、優等賞として図書券が授与された。高校1年の夏休みに、仏文手紙の書き方、フランス語会話読本などとあわせ、1952年8月11日に京橋丸善で、河出書房刊『フランス散文読本』を購入している。パリ生まれで、秩父宮などにフランス語を教えたルネ・ガバルダ先生に、志願院で、目次

に並んだ57人のフランス文筆家について、正統であるか、異端ないし分派であるか、印づけをしてもらった。不合格者は、Voltaire、百科事典、Diderot、ルソー、Hugo、Renan、Zola、Anatole France、Gide、Sartreであった。MontaigneのEssaisには？疑問符。地獄行きが一桁というのは、寛容な禁書判断であった。Martin du GardのLes Thibault(チボー一家の人々)は救済されていた。私はやがて、暁星の先輩(1911年中学卒)である山内義雄さんの仕事によって、修道院を脱出することになる。山内さんは21歳の頃、ジッダの『狭き門』を原語で読み、37歳で『窄き門』(白水社)を世に送っている。2年先輩(1909年卒)には、17世紀フランス思想の名著『信心生活の入門』を邦訳した医者でもある戸塚文卿神父がいる⁵⁾。『チボー一家の人々』も、第7「父の死」公刊後、戦中は軍部の反対で後続篇が刊行できず、敗戦後の1950年になって、第8～10篇が書店に並んだ。私は中学2年生であったが、暁星で誰も白水社のベスト・ロングセラーについて、語らなかつた。1968年に、山内さんは受洗し、カトリック信者として、永眠した。

第2章 秘蹟による恩恵 Sakramentsgnade およびアンシュタルト Anstalt 的恩恵による救済 (Max Weber 『経済と社会』)

救済宗教としてのキリスト教を、Max Weberは3種類に分別している。『経済と社会』第2部第5章第10節「救済方法と生活態度に対するその影響」末尾に表現された3者である。現世の生活から見たカトリックを概括した名称が、この章冒頭にあげたタイトルである。ルターを出発点とするドイツ福音派は、「信仰による救済」とされ、カルヴァンの系統つまりフランスのユグノー、イギリスのピューリタンなど禁欲的プロテスタンティズムを総括して「予定恩恵による救済、」この3種である。小論は私自身の修道院での生活経験を原点とし、最近のベルリンの壁崩壊後のドイツ統一にともなうドイツでのキリスト教の再生までを考察しようと努めている。私の人生経路では、前2者が重視され、Weberが考察の軸とする禁欲的プロテスタンティズムは、私の留学1年目に生活した雪深いストラスブルでの経験を除いて、私との接点はなかつた。小論で

はサクラメント秘蹟と、アンシュタルト制度化した教会にColler糊付けされたカトリックが、検討の対象となる。Collerとは、フランス留学中、学生や裏通りあたりから聞きおぼえた俗語で、同棲を暗示している。狂信的な信仰生活や盲目的な修道院の修行と、そこから脱出した生活をふりかえると、Coller、そして、剥落の2語が、私の感覚を表現している(上野千鶴子「カオス・コスモス・ノモス」『思想』1977年10月号101～122頁)。

Weberは、カトリックの生活では、サクラメントとアンシュタルト(権力的な本性をうまく合理性で隠蔽し、成層の聖職制度を儀式と衣裳で誤まかす制度)が2大特質として住みついていると見た。トレルチは、カトリックに切りこむ時、サクラメントとアンシュタルトから迫っていない。彼の焦点は自然法論であろう。ただ後に紹介するベルリン大学教授ラインホルト・ゼーベルクの『教理史要綱』(1901年に初版)は、まともにサクラメントに注目している。啓示や掟、祈りや徳ではなく⁶⁾。

私自身の生涯で、7つのサクラメントとの接点は幼児洗礼から始まる。カトリックと福音派は、幼児洗礼について古代教会からの論争を継承している。それについては、この紀要第45号の小論で、言及した。幼児洗礼について、私のサクラメント経験は「初聖体拝領」である。戦中で3年生以上は疎開しており、侘しい九段の聖堂での記憶しかない。フランスやイタリアなどカトリック諸国の文芸や美術では、村や小教区(paroisse, Gemeinde)での共同体あげての初聖体拝領が表現されている。Claude ImbertのCe que je crois(1984年刊)の冒頭部分に、1940年6月13日、彼の小教区で拝領した初聖体の思い出が綴られている。小川国夫の『ヨーロッパ古寺巡礼』の36～37頁には、中世由来のポワティエカテドラルであった、初聖体拝領のミサと行列の挙式が、4葉の写真で伝えられている。1976年刊の本である。その10年前には、今は亡き、中村睦男北大学長が留学していたのがPoitiersであり、私もフランス一周旅行で立ちよっている。彼の没後、中村学長が、人間として尽力したアイヌ問題への関わりが、朝日新聞の土曜夕刊の追悼記事になり、私の心を揺すぶった⁷⁾。ポワティエは、ミシェル・フーコーが育った土地でもある。

私の生涯とサクラメントというテーマにもどる。1953年3月24日、つまり、私が高校1年を終了し、

2年生となる直前に、志願院の責任者が作成した「志願者規則」が残っている。この時期は、私の生涯にとって重要である。その後1年間、志願院で志願者集団のプレジダンと呼ばれる、20人を超える中・高生のリーダーとなるよう院長命令を受けていた。当時、高2に11人(うち6人は長崎出身)、高1に5人、中学生が3～4人、サレジオ会の育英工芸高校などに通学する青年が2人という構成であった。24時間いつも共同生活する集団に、心配りを私は求められていた。

通常は5時半起床、夜は9時就寝。朝の祈り、夕の祈りは共同である。朝6時から修道院全構成員でミサ、聖体拝領、それに続き霊的教話を聴く。朝食、登校。地続きで足を一步出すと暁星学園。登校し授業へ出る。12時に、昼食を取るため、中学の北西に隣接する修院大食堂へ向う。下校も足一步。修道院へ帰って掃除、間食、約1時間の運動(体育)。夕刻5時から約1時間半の自習、霊的読書そして夕食前に30分の祈りの時間など。日曜日は、2つ目のミサ、聖務日課、コンプリ、聖体降福式が、平日の聖務に加えられていた。「規則」には追加して火曜と金曜の夕、4時30分から1時間の授業で、公教要理と教会史を学ぶと定められていた。しかし、正統か異端かという問が大半を占めた教会史の授業は記憶しているが、教義学の教育はなかった。福音派では最近パネンベルクや近藤勝彦教授の大冊など、ゼーベルクの要綱を越える教理形成の学問体系が公刊されている。九段の修道志願院には、敗戦時から1960年代まで、教義学への学的志向が無であった。それは抑制の対象であった(トレルチ著作集9巻258～259頁)。

毎週土曜日夜の6時15分から改悛の秘蹟Konfession(告白Geständnis, aveu, 償い=贖宥、良心の糺明、痛悔の順で、通俗は論じられる)に授かれるよう規則に定めてある。志願院で、カトリックの教義学を誰も教えなかったので、この小論を書いていて、教会が1215年以来、sacrement de pénitanceの構成に配慮した経過を初めて学んだ。フーコーの『性の歴史 1 知への意志』邦訳も、誤訳の訂正や教義の歴史的説明などを日本の読者に提供すべきである。1.良心の糺明 2.痛悔 3.告白 4.贖宥の順で重視すべきといわれる。

修道院では教会既定の告解の秘蹟の他に、誓願を立願した学生修道士(私の場合は高校3年から)に

は、自白忠告会への参加義務があった。だから高校3年からは、ますます「知への意志」は混乱してしまう。修道院の規定は下記の如し。「自白は初誓願宣立の新古の順による。自分の順番が来たら、跪いて十字架の印をなし、次の形式で、過失を告白する。わたくしは、……に……度違反し、……を……度破りました。以下略」(『マリア会祈祷文』116～117頁)。告解の秘蹟と相違して秘密は守られず、後日大喧嘩になりうる。騒ぎにならないよう、新古の順が厳守され、古参から先に忠告された新参者は、黙して反論は赦されない。毎週順番は固定されているから、新参者が反論できない日々が続く。これが自白と忠告の会で、私が高3から駒場の1年と2年の夏休みまで、この憂うつな聖務は、私の神経症の誘因であった。司会者が特定の個人を追いつめる機会となっていた。

「志願者規則」からもわかるが、志願院では、ミサと聖体拝領、告解、聖体降福式などの sacrament の実践が重視されていた。将来、肉体労働に従事する青少年も、志願者として受け入れており、事実プレジダンとして、私は農・漁村出身の中学生の勉強の世話に時間を取られた。縁故で、長崎の五島列島あたりから中学生で上京した志願者が、途中で東京九段の暁星で授業に追いつく。それは、苦難の思春期であった。しかし、ミサや聖体拝領、告解などは、五島や西海国立公園内の生月や黒島といったキリシタンの伝承がある地で少年期を経験した志願者にとって、私のような都会育ちより、日常的であり、疎外感もなかったようだ。

キリシタンの末裔でない、日本の福音教会のクリスチャンや、無教会派の東大エリート知識人は、sacrament に無縁であり、無関心であった。関心があっても、理解は分裂していて、内紛が絶えないようである。福音派によるキリスト教の入門書では、内紛の基を避けようと慎重な編集が目立つ。たとえば、1966年発行の『現代キリスト教講座 第1巻キリスト教の教義』では、救済や聖霊、贖罪などのテーマはあるが、秘蹟は全く論じられていない。佐藤敏夫の仕事には教えられたことが多々あるが、『キリスト教信仰概説』はどうだろう。1976年に初版が公刊され、1998年3月までに19版を重ねている。第18章で「教会の二重の側面」から、sacrament について言及している。2つの側面とは、制度としての教会と信仰者の共同体としての教会であ

る。さらに「神と人との制度的媒体は、まだ実現していない神の国では止揚されるが、今日の社会では存続している」(173-175頁)という。第24章「神の国と永遠の生命」では、制度としての現世の教会で、制度的に神と交わる媒体の一つとして、聖書・礼拝・説教と並べて sacrament があげられている。

佐藤敏夫は先の第24章で、スピリチュアリズムを批判して次のように書いている。「彼らは聖書だけではなく、あらゆる制度的媒体を止揚して、直接的に神と交わろうとするものであり、神秘主義の一種である。しかし、これは神の国においてこそ期待すべきものを、この世において求めようとする誤謬を侵しているものである」(174頁)。この概説のあとがきに次の言葉がある。「本書は、まだ完璧とはいいがたいが、(改訂によって)多少でも前進しえたことを慰めとしたい。一つ、sacrament に関する章がないのが心残りであるが、これは他日を期したい」(179頁)。1998年版によって私は引用している。その後の佐藤さんの sacrament 論は、拝読していない。

私が東京大学に入学した1956年ごろは、東京大学で、サークル活動が社会と実践的につながり、活気があった。カトリック研究会も教育研究会も、セツメント活動や、原水爆禁止運動などに関与していた。駒場では、「無教会主義」のクリスチャンが、影響力を保持していた。無教会の運動は、内村鑑三を開祖とする。日本独自のキリスト者集団で、「教会的なあらゆる諸制度を無視し、聖書の研究と伝道に従事する人々の実践活動」(『広辞苑』)とされる。東大の当時の学長矢内原忠雄が代表的人物であった。1956年、安田講堂での入学式で矢内原さんが何を語ったか。全く記憶していない。しかし、彼の姿は今も私の全身に焼きついている。背骨の代りに、日本刀が差さっている、否、抜きみの刃が刺さっている、と感じた。鋼鉄は、如何に、鍛えられるか。新入生に言葉ではなく、姿勢で訓示していた。

矢内原が『キリスト教入門』(角川新書 1952年11月15日初版)で、教会と sacrament について語っている文章を読む。「エクレシアにおける霊の繋りは、できるだけ強固であり、制度的な繋りは、できるだけ緩いことが、エクレシアの本質にかなう……教会で最も重んずる儀式は洗礼と聖餐とであります……洗礼は信仰により、古き己に死んで、新しき我に生きるかたどりである……この形式を用いて

もよいし、他の象徴たる形式を用いてもよい……きまった形式を用いなくてもよい」(169頁)。「聖餐ということも、やはり象徴であり、伝統であります。パンそのもの、ブドー酒そのものに意味あるわけではない……イエスと一つになりなさい、という教えである……イエスを信ずるということ、同じイエスを信ずることによって、汝らは一つの肉につらなる兄弟姉妹であるということ、この2つの事を象徴するのが、聖餐という儀式なのです」(171頁)。「食べるという事に拘泥する事はない。……パンとブドー酒が、キリスト者を造るわけではない」(173頁)。「人がキリスト者となるのは制度の事ではなく、信仰の事である……無教会を支配する生活原理は、霊による信仰の自由です」(175頁)。「無教会は組織化させられたならば、それで終わってしまう。無教会は生命であるから、制度的に組織するべきではない」(176頁)。アンシュタルトとして、制度的恩恵に固着したカトリック教会制度に向けられた、矢内原さんの刃の言葉だった。

第3章 Kirchen und Sekten

トレルチは『キリスト教の諸教会と諸集団の社会教説Die Soziallehren der christlichen Kirchen und Gruppen (1912)』第2章「中世カトリシズム」第9節「絶対的の神法と自然法、そしてセクト」で、次のように書いている。「教会は最初の数世紀には、しばしばセクト・タイプと教会・タイプの間を揺れ動いていた。祭司と sacrament に関する教説の形成と共に、始めて教会という類型を完成した。この問題の最初の明らかな兆しは、アウグスティヌスの sacrament 的・教階制的教会概念とドナティストとの対立である」(高野晃兆訳 226頁)。

セクト(教派・分派)を検討したこのトレルチの『社会教説』第2章第9節は、直前の第8節「トマス主義の原理による中世の社会哲学」(137-219頁)と同じく詳細である(220-296頁)。ラインホルト・ゼーベルクの『教理史要綱』(1901年に初版)は、教会の教理体系の歴史的解明を目的としている。ゼーベルクも「教理史叙述の課題は、教理が教会全体ならびに文化の発展と密接に関わりながら成立したものであるから、厳密な意味での教理の範囲を越える」と序論で述べている。セクトまでは越境していないが、文化プロテスタンティズムの継承者である

トレルチは、中世11世紀イタリアの社会的発展とカトリック派やワルドー派から論述を始め、中世後期のウィクリフやフスの社会的運動の諸分派を宗教改革につなげている⁸⁾。カトリック教会が教えるトマスの自然法論とは相違する、パドヴァのマルシリウス⁹⁾の自然法論を、中世末期の世俗的自然法論におけるセクト的立論として注目している。私自身も、私の内面での「教会文化の解体」(トレルチの邦訳 中巻 291頁)を見つめる過程で、フス派とコメニウスを経て、世俗主義と「キリスト教の真理の核に対して、さまざまな態度を許す、組織なき宗教的個人主義」(トレルチ『社会教説』邦訳 中巻 結論と展望 293頁)との結びつきを、修士論文でも探求した。しかし、Weberもトレルチも、その他の研究者も、20世紀の混沌にあって、探求の道を見失った感がある。

大学院の修士課程1年の時であった。コメニウス Comenius の『大教授学』(1657年刊 ラテン語版と独訳のテキストが教材にされた。教育を担当した社会学者は、テキスト冒頭の数章が、彼岸的であるとして読解の対象としなかった。東京大学大学院のゼミナールである。1960年4月から7月まで安保反対闘争で、教授も学生も街へ出て声をあげており、本郷の教室は5月祭以降カラとなっていた。コメニウス研究は、秋から始まったと思う。コメニウスのテキストを社会学者は「天国送致」処分にした。私は反対した。教授とはケンカになり、秋以降、ゼミに私は出席せず、単位不足で、結局は修士課程も3年間となった。修論は、400枚ぐらいになったが、未完で提出した。タイトルは『ルソーの教育思想における人間の自由の問題』。北大の中村陸男元学長のように、人間の自由について、自然法から社会権へという方向もあったのだが、当時、まだトレルチの『社会教説』の邦訳もなく、修論を讀了した教育学者、社会倫理の研究者からも、研究の道がどこにあるのかを暗示する言葉はなかった(勝田、中内『日本の学校』224頁)。

今、小論を執筆していく時、告解の秘蹟についての文献として、Jean Delumeau の L'aveu et le pardon (1990年)『告白と許し』を讀んだ。その結びに Delumeau は次のように書いている。「13世紀から18世紀のあいだに、倫理神学で、悔悛の秘蹟に関する大量の考察が行われた。その結果、〈自然法〉という概念がしだいに疑われだし、個人の良心や個

人的責任に、多くの価値が認められるようになった。そうしたメッセージは、いまだに今日的な意義を持ち続けている」(邦訳196頁)。

天地創造と原罪や失楽園、それにカインの殺人、この『創世記』が、普遍主義的自然法の基礎にある。だがトレルチは、宗教的個人主義を絶対的自然法(神法)と相対的自然法の区別に結びつけ、論じている。詳細な理論構成は他の機会に再論したいが、トレルチによると「絶対的自然法は《イエスの律法》に依存している……イエスの律法は、3つの厳格な完全な意味での自然の律法であり……広範囲な愛の共産主義とそれに応じた愛の活動の意味で考えられ、時には自由と平等の民主的思想を帯びている」。セクト運動はそこから個人的急進主義に結びついていく(『社会教説』中巻 256頁)。

トレルチの『社会教説』がわかりにくいのは、Weberとの交流からも生じている。Max Weberが1904年にアメリカ旅行を試み、そこでアメリカで発展した福音派諸分派と交流した。その体験から、1906年4月と5月にドイツの名門紙Frankfurter ZeitungにKirchen und Sektenと題する論説を発表している。これらが再編集され、14年後にDie protestantischen Sekten und der Geist des Kapitalismus『プロテスタンティズムの教派と資本主義の精神』(1920)の単著になる。WeberのKirchen und Sekten(1906年)に触発され、トレルチも『近代世界の成立に対するプロテスタンティズムの意義』(1906年に初版)で、教会とセクト2者対置を執筆している。ところがトレルチは、同書の第2版1911年版で、Sektenの他に、第3類として神秘主義、霊性論スピリチュアリズムの個人主義を評価した¹⁰⁾。

日本でも今日、若松英輔などに代表され、カトリック教会から岩波書店に至るまで、カトリック的・日本的霊性論ブームとなっている。ドイツのトレルチだけでなく、フランスの科学史の権威コワレ¹¹⁾が、1932年にMystiques, spirituels, alchimistes du XVI^e siecle allemandで、セバスチアン・フランク(1499-1542)など4人の霊性論者を論じている。イエズス会を創立したスペイン出身のイグナチオ・デ・ロヨラが16世紀前半期に考案した『霊操 Exercices spirituels』や、今は邦訳もあるW. JägerのWiederkehr der Mystik: Das Ewige im Jetzt erfahrenなど、神秘主義や霊性論を、教会もセクト

も評価している意義が問われる。

残された課題は多く、また現代日本で、教育学的課題となるかと問われましょう。しかし表現し難いがたいが、日本のキリスト教ミッションスクールの現状は、ウクライナのプチャの廃墟を連想させる。無責任に日本に侵攻(宣教)し、子どもを閉じこめ、はては修道士である教師が、学校で神父を殺害した現実がある。旧東ドイツのマルクス主義教育も疑問だが、旧西ドイツ伝承の「公立学校での義務教科としての宗派教育」も、今日的意味が問われ、統一ドイツで新しい試みが生まれた。

東大教育学部教授会にも多くのカトリック信者がいた。カトリック教育学会の会長もいたし、数名の信者が同時に一学科の教育を担当していた時期もある。私から見ると、Anstalt的秘蹟論をどうして彼らは信奉できたのだろうか。私としては、矢内原先生の信念に近い。しかし、かなり以前にも書いたが、矢内原先生の教育説にも、しっくりこない。橋田邦彦に対峙する霊性主義者みたいで、合点がいけない(矢内原忠雄『政治と人間』182-188 254~256 271~277頁)。フーコーにも、「牧人=司祭型権力」への批判から、霊性主義修行僧のような姿がちらつく。小論を閉じるにあたり、カトリックの美術の伝える秘蹟に対し、ラファエロが残した批判的表現で、静けさを回復しよう。

エミール・マールの『ヨーロッパのキリスト教美術』岩波文庫版の下巻223頁から、第3章「トレント公会議以後の宗教美術」が始まり、237頁から「美術は秘蹟を擁護する」と題されている。第一に悔悛の秘蹟があげられており、内容として「自らの罪に涙するマリヤ・マグタレーナが、この秘蹟を表わす人物像である」という。「神ただ一人のために、ひっそりと燻る香のように、人々の視線の及ばない所で、少しずつ色あせてゆくこの美は、想像しうる限りで、もっとも悲愴な悔悛のイメージである」。マールは、ホセー・デ・リベラ(1591-1652)の描くマリア、「跪くマリア・マグタレーナ」が好きなようだ。しかし、日本の岡田温司教授は、17世紀のマリアのなかにリベラの描く「跪くマリヤ」の姿を認めようとはしていない(『マグダラのマリア エロスとアガペーの聖女』中公新書 No. 1781)。

マールは「悔悛の秘蹟の次に、美術は聖体の秘蹟を擁護する」と書く。「聖体の秘蹟が美術に登場するのは、ひとえに大いなる宗教論争の結果であった

と言えよう……中世が、その盛期に聖体拝領を表現したことはほとんどない。……このキリスト教徒の至高の行為ほど、表現されることが稀なものはない。逆に17世紀になると、これほどしばしば表現されたものはない」。たしかに12巻本の *Histoire de la peinture* 第7巻をひもどいても、紹介されている176葉の絵画のうち、聖体の秘蹟関連の美術は、フランス国立図書館蔵のNo. 64. 11世紀終りに描かれた聖人像の絵のみである。フランス語に通じている日本人にもなじみのないタイトル、*Saint Aubin benit les saintes espèces*。後半のフランス語は、聖別されたパンとブドウ酒の意味である。絵画でも、また肉眼でも、キリストの肉と血とは見えないが、ミサ中の奉獻の言葉によって、実体変化していると、教会は教えている。実体変化だから、*saintes espèces* になったパンとブドウ酒は、外観と相違して、キリストの肉と血とされる。消化吸収されて外観が消失すると、イエス・キリストも消え、トイレに行くのは残骸だという。東大の教育学部教授が、どうして「実体変化」なる教えを信仰しているのかと、彼がミサで聖体拝領している姿を見て、考え込んだ時期も、私の生涯にはあった。

留学中、フランス農民とローマ巡礼に行った時、カタコンブには巡礼した。Vaticanには行かなかった。それで、1968年8月、猛暑の夏に、日本への帰途、Vaticanへ寄った。『最後の審判』など、見るべき美には接し、病床の勝田先生にと、美的記念の品々を求めた。留学中には、ルルドやアルス、テーゼ、ClunyやCiteauxなどにも行った。他方、フリーメーソンの集會に招待されたりした。文化の総体のごく一部だったかもしれないが、帰途のVaticanで、また一撃を喰らうというか、一生の課題をいただいたような絵画に会った。

それは、ラファエッロの「聖体の論議 *Disputa del sacramento* (1509-1511)」である。このラファエッロの *fresque* 大壁画は、Vatican美術館の一室にある。長い間教皇庁裁判所として使用された部屋だったので、「署名の間 *Stance dite de la signature*」と呼ばれる部屋である。ラファエッロの名画が、この部屋の東西南北、四方の壁面を飾っている。フィレンツェの哲学者マルシリウス・フィチノのキリスト教的プラトニズムの影響を受け、真・善・美の表現である。真は2面で対置され、一枚は有名な *scuola di athene* アテネの学堂が、対する壁面にはラファ

エッロが把握した、キリスト教神学による真理が表現されている。基本的には、聖三位の神、諸聖人と予言者たちが上方に描かれ、童貞マリアや洗者ヨハネなどの表現もある。下方で天と地を結ぶ教会の中心に、聖体顕示台 *ostensioir* が描かれている。

聖体顕示台（ドイツ語では *die Monstranz*）を多くの日本人は見た経験がないだろう。東星学園の戦災孤児たちと一緒に、敗戦後の教会で、小学3年生から私は見なれて来た。修道院では、毎週一回は顕示式があった。戦後の占領下、占領軍の威を借りた教会が、東京都の公道を用いて聖体行列を強行していた時期には、偶然に町の人々も見ただろう。覚えている高齢者がいるかも。幸いなことに、小学館の *独和大辞典* 第2版2000年刊の1561頁に、図が記載されている。しかし実物大でないし、黄金色でもないから、全く威圧感伝わらない。ラファエッロは、この *Disputa del sacramento* を1509~1511年の時期に描いたと伝えられる。2面に真理を対置した意図は明白であり、真理はこの時期、いまだ統一されていなかったのだ。日本では、〈アテナイの学堂〉だけが教えられ、東大生の多くも、Vaticanのミケランジェロは〈最後の審判〉、ラファエッロは〈アテナイの学堂〉と反応するだろう。

問題は、さらに深い。今日 Vatican美術館の案内書でも *Disputa del Sacramento* (フランス語では *la Dispute du Saint Sacrement*) とこの絵は呼ばれているが、製作当時には、このような名称ではなかったという。(坂口昂は「談論」と訳した。) 聖体をめぐる論争という名称は、17世紀以降に普及したという。1968年8月に、私がVatican美術館で購入したガイドブックの解説(146-149頁)は、〈聖体をめぐる論争〉と呼ぶのは、誤りだと主張している。この300頁を越え、43葉の写真を含むガイドブックには、個別の著者名がない。ただ検閲責任者の名だけは最終頁にある。無名の筆者は、ラファエッロが描いた絵は、「教会の勝利」を表現していたと記している。論争か勝利か。今日の日本人は、どう眺めるのか。ラファエッロの時代(1510年前後)の後、イエズス会など、教義を緩やかに理解すると、弛緩だと批判する人との対立が厳しくなる。宗教戦争があり、トリエントの公会議(1543-63)があった。ナントの勅令(1598年)、アンリ4世の暗殺そして1618年~48年の長期にわたる30年戦争で、〈教会の勝利〉はむなしくなる。アルノーの *De la Fréquente*

Communion『頻繁な聖体拝領』(1643年刊)などが、〈教会の勝利〉から〈聖体をめぐる論争〉へ、名目の呼び名を変える流れを引きおこした¹²⁾。

日本人にはscuola di atheneアテネの学堂が好まれ、disputa del sacramento〈論争〉が理解できないのは当然である。〈三位一体〉を絵画で説得できるのか。聖霊を鳩が象徴できるか。パンがキリストの肉なのか。不可解と感じるのは自然である。教会の勝利をラファエッロ自身が描ききったとしても、すでにフス派の社会運動が吹きあれており、ルターやカルヴァン、そして農民の反乱をともなう宗教改革運動と宗教戦争さらには30年戦争まで生じた歴史の流れである。「公制度」とか「強制団体」とか邦訳されるアンシュタルト、その代表である国家や教会に対し、またその背後に信じられた神に対し、それを疑い否定する無神論、無教会、アナキズムが、人々の心を捕えていく。

今は、駒場の職員でも、矢内原忠雄とはと問われ、黙して語らないケースがある。学部生の多くも、学部を建設した先生を知らない。

内村鑑三や矢内原忠雄の後、駒場では古典学の前田護郎先生などが、70年代前半まで無教会の伝統を守ってきた。1965年から、私が留学でき、しかも往復の航空旅費までフランス政府から支給されたのは、前田先生の配慮による。ただし、前田護郎先生に、直接お会いした記憶はない。私は当時、無教会であったが、ひとり道を求めている。学部卒論でブルードンの『革命と教会における正義De la justice dans la révolution et dans l'Église』(1858年)を学んだ。ブーグレ編の全集版が、国立の一橋大学図書館メンガー文庫にあったので、それを利用した。アナキズムと私の接点は、意外と身近にあった。修練院に行く前、志願院で生活している時期、高校2年までは、夏休みに実家へ帰省できた。当時、私の父親は1950年から、東横線武蔵小杉駅に近い東横病院の医者として、新丸子駅近くに住んでいた。私も夏休みを、小杉御殿町で過ごしていた。

新丸子駅の南側に、甘露書房という名の小さな古書店があった。その店主が、おそらく大正期末の、生き残りアナキストだった。大杉栄の自叙伝などを読むと、大杉も暁星中学校に学ぶ機会があったようだし(岩波文庫版117頁、142頁)、本郷教会で受洗したクリスチャンの時期もあった(176-178頁)。しかも『日本脱出記』を読むと、「パリの便所」の章

(312-326頁)で、大杉が1923年4月に、パリで経験したことが書かれている。45年後、つまり5月革命のパリで、私も同様な経験をしており、共感した(日本子どもを守る会編子ども白書 1973年版 513~520頁)。新丸子の大正アナキストは、『黒旗』を私に見せびらかしたり、思春期の私に「甘露」の正しい意味を講釈したりもした。そこで私がどういう古書を購入したか、記憶していない。駒場の2年目に、修道院から追放され、新丸子の実家に保護される。だから当然のように、学部卒論は、フランスの空想的(ユートピア的)共産主義者Cabet、アナキスト・ブルードン、人類教のコント、3者に学ぶことになった。当時つきあい、2人だけで会津磐梯山に登ったネラン神父(後に、新宿でバーを開いた。サン・シール士官学校卒の元フランス軍士官)が、Henri de Lubacの 労作Le drame de l'humanisme athéeを私に長期間、貸して下さった。私は夏から秋にかけて、駒場で、当時の第2本館(今はもうない)4階にあった勝田先生の研究室のカギを借用し、一人こもって、卒論を書いた。当時私がただ一人の友人としていたヒトが、最終的に校閲して、訂正し、提出した。甘露書房は、修道院から世間へ帰った青年に対して、アナーキーではなかった(ブルードン『連合主義論』などを学べた)。

九段の志願院では、中学から高校2年まで、どういう本とめぐり合っていたのか。小学5年6年について、メモはない。中学2年から3年の時、夏休みには小杉に帰省していた。この2年のどちらかの夏に、実家から九段の志願院に出かけて、学習室の書棚に保管されている蔵書を調べ、目録を一人で作っている。ノートのようなものに列挙し、完成した目録を、監督の松口広見修道士に提出した。暁星学園には、小中高、いずれの段階でも、図書館がなかった。志願院でも、読書への関心は、指導者である神父や修道士になかった。この点は、四谷つまり上智のイエズス会士たちとは、全く異なり嘆かわしい知的貧困に留まっていたと思う。小学5年生で九段に行き、学習室の蔵書で注目したのは、礼儀作法書の多さであった。小笠原流の作法指南書も複数あった。次は、戦時中、軍部から修身教授用として指示されたと思われる、日本精神の涵養に資するような、傑僧、愛国者、軍功ある戦死者などの逸話集である。通俗的な書物としては、吉川英治の『三国志』など。文庫本は、ほとんどない状態

で、幸田露伴の『五重塔』だけがあった気がする。教会関係では、外国の聖人聖女、たとえば、ドン・ボスコとか、リジューのテレジアとか、戦前から日本に紹介されていた聖人伝など。こういう状態だから、中学生でも、川崎から九段に来て、一日か二日で、蔵書目録が作れるような貧困さ。しかも目録は私に返されなかった。暁星出身の岩下壮一、戸塚文卿の著作や、戦前から日本のブルジョワ・カトリック女性が愛読した『ファビオラ』もなかった。

私が、もっとも愛読したのは、執筆者も、正確な書名も記憶していない『警視庁抜刀隊』という本。維新戦争下、佐幕派にあって、苦難の生活へ追いやられた旧東北藩諸の浪士が、西南戦争当時、警視庁により急募され、熊本の田原坂の闘いなどで、維新戦争のリヴェンジを果たしたドキュメント。今も85歳の私の骨を、創り続けている仇討ちの気概。

注

- 1) Kindheit und Jugend vor Neunzehnhundert. Hermann Hesse in Briefen und Lebenszeugnissen. 1877-1895 (1973年刊 Suhrkamp). S. 106
- 2) ジャック・ルゴフ (柏木訳)：中世の知識人 (岩波新書 1977年刊、29頁)。デュビイ、マンドルー (前川訳)：フランス文化史 I 129-133頁。Citeaux (案内のパンフ) (1965年刊)。
- 3) キリスト教美術を鑑賞して理解するには時間が必要だった。留学して2度目のクリスマスはClunyで過ごし、Vézelayへは、ルーヴァン大学の学生と巡礼を、1967年夏に試みた。
- 4) 現状について、必読の書。寄川条路編：大学における〈学問 教育 表現の自由を問う〉、2018年12月刊、法律文化社。敗戦直後の志願院では、新聞 (カトリック新聞も含め)、雑誌類すべて禁書。ラジオもだめ。実家からの私信、荷物も検閲。院長による没収もあった。
- 5) この書については、次の論文がある。エレヌ・ミション「祈り、行動から〈生の法悦〉へ」『思想』2018年2月号所収82～104頁。
- 6) Reinhold Seeberg: Grundriss der Dogmengeschichte (第6版が1934年刊) 住谷真訳1991年刊『教理史要綱』274頁。自然法については、次号以下で記述する。
- 7) 中村睦男：フランス憲法における社会権の発展 北大法学論集 第14巻第2号 第15巻第1号と第2号。中村睦男他編：平和憲法とともに 深瀬忠一の人と学問

2020年刊。

- 8) フリードリヒ・ヴィルヘルム、グラーフ『トレルチとドイツ文化プロテスタンティズム』(深井、安酸編訳 2001年刊)に、神学政治的暗号としての〈文化プロテスタンティズム〉の歴史的説明がある。
- 9) Marsiglio de Padua (1290-1343) 中世後期の法哲学・政治哲学分野で、現実的で人間的な主張をした学者。フランスのGeorge de Lagardeが、『中世末期における世俗的精神の誕生』の第3巻で、390頁もかけてマルシリウスのLe Defensor Pacis『平和の擁護者』を考察している。市民的共同体とは、教会は社会か、などを問うた。
- 10) 『トレルチ著作集』第8巻の「解説あとがき」(堀孝彦)を参照されたい。特に、神秘主義的スピリチュアリズムと良心の自由とについて言及している356～374頁を。朝日新聞今年7月1日紙上13頁のオピニオン「〈普遍的価値〉を問い直す」(佐伯啓思)も、Anstalt論に育てられた自然法論と教育学を、現代日本で問い直す参考になる。
- 11) コイレKoyréは『コスモスの崩壊—閉ざされた世界から無限の宇宙へ』の著者として、日本でも知られている。1974年刊の白水社版の訳者あとがきによると、コイレは「1892年8月28日、アゾフ海に面する南ロシアの港町タガンログに生まれた」とある。今、激戦下にあるマリウポリの隣町であり、私にとっては、幼少期から慣れ親しんだ呼び方をすれば、スターリングラードから直線で約500kmほどの距離の地である。毎日、多くの民間人、特に子どもたちが、生命を失った非常時に、小論が綴られたことを、最後に記して終わる。
- 12) 坂口昂『ルネッサンス史概説 フロレンス及びローマを中心として』(昭和5年に1刷、昭和22年に2刷)第20節、232～242頁。挿絵No.17。秋山聰、田中正文『西洋美術史』2021年刊、153頁。